

## 活動状況報告（12月）

文化芸術コース 4期生 北浦 由花里

ポーランドの秋はすっかり終わり、寒くも美しい冬の季節がやってきました。ワルシャワ中心部がイルミネーションでライトアップされ、街だけではなく多くの人の心をも照らしていました。12月は、カトリックを信仰しているポーランドの人々にとって重要な行事である、クリスマスがありました。ポーランドのクリスマスは他の国に比べてとてもユニークで、素敵な文化がたくさんあります。多くの国では、チキン等のお肉料理を食べるかと思いますが、ポーランドではお肉は食べられず、その代わりに鯉（もしくは鱈）を食べます。そして、スープからデザートまで合わせて12種類の料理を出さなければいけないようです。そして、イエス・キリストが生まれたことを思い出させるために、テーブルクロスの下に干し草を敷きます。さらに、予期せぬゲストが来てもいいように（実際に来ることはないのですが）、空席を必ず一つ用意します。クリスマスを孤独に過ごすことのないように、というポーランドの温かい文化の一つではないでしょうか。

こうしてポーランドにやってきたことで、様々な行事を通してこの国の文化に触れることができます。楽譜ばかり見ているだけでなく、その国独自の文化を学び、体験することも留学における意義だと思っています。特にポーランドは、カトリックに則ったユニークな文化がたくさんあるので、目をよく開いて学べたらいいなと考えています。

こちらに到着し環境に慣れてきたので、演奏会にも度々足を運ぶようになりました。ポーランドだけではなく、ヨーロッパ全体に言えることだと思いますが、クラシックの演奏会があちこちで毎日のように開催されています。そこには、音楽を楽しむ市民の方々の姿があります。今回私は、ポーランド人作曲家たちが作ったマズルカ(mazurka…ポーランドの代表的な民族舞曲)のみを集めた演奏会を聴きに行きました。”マズルカ”といえば、ショパンを思い浮かべるかもしれませんが、この演奏会ではショパンには触れず、18世紀から20世紀までにポーランド人作曲家によって書かれたマズルカが演奏されていました。日本ではショパン以外のマズルカを耳にする機会がなかったので、その色とりどりのマズルカたちに心を奪われ、それぞれの作曲家たちのマズルカの違いを楽しむことができました。決して有名な曲ばかりではありませんでしたが、自分たちの国の音楽を楽しむ市民が多くいたことにも驚きました。また、帰国後にこういった様々な民族舞曲を集めた演奏会をするのも素敵だな、と今後の活動の参考になりました。

さて、今月は冬学期のピアノの試験がありました。ピアノ協奏曲（※ピアノがオーケストラをバックに演奏する形式のこと）が課題の実技試験でした。曲目は、ポーランドの作曲家であるイグナツィ・ヤン・パデレフスキ（Ignacy Jan Paderewski, 1860年-1941年）の『ポーランド幻想曲作品19(Fantasie polonaise Op.19)』を演奏しました。実際の試験はオーケストラとではなく、2台のピアノで行われました。結果としては、無事終了し、良い評価もいただくことができました。伴奏科のポーランド人の助手の先生が伴奏（※伴奏…楽曲の主旋律や主声部を支えるために、副次的に演奏すること）をしてくださいましたが、彼の演奏するピアノからも多くの事を学びました。先生は、1回の練習で完璧にこちらに合わせて弾いてくださり、”私がどう演奏したいのか”という意図を、私の演奏やコミュニケーションを重ねていくことから読み取っていました。3回程度の2人での練習で、私が満足いく演奏に仕上げてくださいだったので、今後この能力を磨いていかなければならないなと思いました。私は現在、ピアノソロだけではなく室内楽（※室内楽…少人数で構成される独奏楽器による合奏音楽のこと）の授業も受講しているので、今回のこの試験は、自分が伴奏される側に立った良い経験でした。

